

妖怪ちゃうんか？

★京都府 京北 美山川
☆唐戸溪谷

「・・・とりあえず出合橋まで行つて見よか？」
いつもの料理屋で魚券を貰うと、まずはいつものお決まりパターン・・・

出合橋の袂に車を停めて川の様子を伺った。

「どおしょう？・・・佐々里？」

「・・・今日は唐戸からにせえへん？」

「どうしょうか・・・」

車をリターンさせて路肩の工事現場に放置されたコンボの隣に車を停めた。ここはかなり高台になっていて、出合橋から巨岩を縫った険しい流れがぶつかり、滔々としながらも幾分柔らかな流れに溪層を変える風光明媚な溪谷が一望できる場所である。

車を降りて深呼吸すると同時に川原を見下ろす目線は何故だかひとりの老婆を探していた。

(今日はおらへんなあ・・・あの婆さん・・・)

「このあたりの川原でワサビが採れんねん

なあ・・・」

「もっと小さな沢筋ちゃうんか？・・・ワサビって？」

「いや・・・この前、この下で婆さんが採ってたわ・・・目の前で採りよったもん・・・直毛

白髪の婆さんでなあ・・・眉毛もぶ太くて
「砂かけ婆」みたいやったわ・・・」

「そんな婆さん、こんなところに、どこから
どうやって来んねん？」「砂かけ婆」って、
その婆さん妖怪ちゃうんか？」

「あほ言うな・・・ワシ等より川歩きが上手な
婆さんやったで・・・」

連れ合いと別れると車道を下流方向に下り、
「唐戸の溪谷」と書かれた看板から入川道を下
って川原に降りた。

降りたところは中州があつて、いつもどおり
に奥側の流れを攻める・・・一投目に綺麗に出
て乗った。

「よっしゃあ・・・今日はエエでえ」

この中州の上流には大きなプールがあつて、
上流を自指すにはまず渡らねばならない。

しかし・・・これが結構深い。

私は一般的にフライフィッシャーが好むと言
われるチェストハイウエイダーではなくウエス
トハイを常用している。3Lサイズの体格なの
で溪流で必要性を感じたことがない・・・と言
うのが本当の所かもしれないが、私に習つてこ
の釣りを始めた仲間達も皆ウエストハイを愛用
している。ところが時々・・・

「後ついて行く身にもなつてえや！・・・
水没寸前なんやでえ！」

「どうなん？」・・・と言つた会話も時々ある様

に、SサイズやMサイズでは厳しいところもあ
るらしい。

この唐戸溪谷もそのひとつ、特にこの中州の
上手にあるプールもコース取りを間違えれば私
のウエストハイでも水没してしまう。

「さあてと・・・？あれ？」

プールを渡ろうとすると対岸にひとりの爺さ
んが座り込んでいる。しかも仕舞い込んではい
るものの手には釣竿を握り締めていた。

(なんじゃい？先行者か？)・・・思うやいな
や、爺さんが笑顔で「渡つて釣り上がってく
れ！」と言つた手招きをしてくれた。

品の良さそうな爺さんで笑顔を欠かさない。
私も笑顔で頭をチョコンと下げて遠慮なく渡ら
せてもらうことにした。今日は一段と水量が多
く、慎重にコース取りを見極めて渡りきった。

「スンマセン・・・」

「どおぞ・・・どおぞ・・・上手の工事して
る所から下がって来ましたんで遠慮なく上
がって下さい。もう大分時間たつてるよっ
て大丈夫でしょう・・・」

「どうです？釣れました？」

「いやいや・・・なかなか・・・」・・・という話か
ら始まって、いつもながらに釣り人の川原休憩
釣談義が始まる。しかし、ひとしきり話し込ん
でそろそろ話を切り上げて釣り上がろうとする
と、またもや後ろ髪を引っ張る様に話をされ、

またまた釣談義・・・この様な状況が何度か繰り返された。

「ほな、やって見ますわー!・・・と立ち去ろうとする・・・」

「ここから上がるのはここを渡るしかないんですかね?ちょっと上手に上げれるところありますか?」

「いやあ・・・上手は工事現場まで無理でっしゃろ・・・そこから降りて来はったんでっしゃろ?」

「エエ・・・」

「ここ渡るしかないんとかやいますか?」

・・・と答えた途端、ピンと来た。この爺さんはウエストハイの先割れバカ長を履いている。

(この爺さん下がって来たんわエエものの、渡れんで途方に暮れとったんちゃうか?)

思わず笑いが込み上げて来たと同時にとんでもない事を口走ってしまった。

「オブリまひよか?」

「いやいやよろしい・・・よろしい・・・」

言いながらしっかり立ち上がっている。

人の良さそうな爺さんについて調子に乗ってしまった。

「遠慮しなはんな!・・・かまあしまへんて!」

公共乗り物で老人に席を譲る時と同じく、譲らざるを得ない方と、仕方なく譲る方がおられるが、この爺さんは間違いなく前者だった。

「すみませんなあ・・・無理せんといて下さいねえ・・・」

「大丈夫!大丈夫!だいじょおおぶ!」
・・・と言って爺さんを背負った。

ところが・・・これが全然大丈夫ではない・・・!

人の良い爺さんは背中に飛び乗ると想像を遥かに上回り、まるで石の様な重さである。

そう・・・「子泣き爺」に変身してしまった。この時始めて我に返り、トンでもない事を口走ったと後悔した。

「行けますか?」

「・・・エエ・・・大丈夫です。」

(こんなに重いんや・・・こりゃエライこつちゃで・・・途中でズッコケたら洒落にもならんし、やっぱりあきまへん・・・なんて今更言われへんし!・・・ヤバァ・・・でも、もう渡るしかないし!)

「ほな、わたりまっせ!・・・」

「ああ・・・すんまへん・・・」

先程渡ったコースを逆にゆっくりゆっくり慎重に渡る。

人を背負うと背丈も少し縮み、ウェイダーの吸気口から水が入って来た。

(ヤバ・・・)・・・慌てて最後の力を振り絞

りどうにか渡りきった。

「はあ・・・ありがとございます。助かった!・・・もう、どないしようか思ってますん・・・ホンマ助かりましたありがとございます。」
礼を言う爺さんに笑顔で平静を装い対岸に戻る。

爺さんが車道に上がりきったのを見届けてウェイダーを脱ぎ、ひっくり返すと中はビショビショ・・・

「何でワシが濡れなあかんねん?・・・でも待てよ?あの爺さん人の良さそうな顔して渡って下さいって・・・ワシが渡らな自分が渡られへんやんけ!・・・ホンマ・・・」

その日の帰り・・・車中で話すと連れ合いが・・・
「アハハハ・・・ほんで?」(笑)、爺さん渡して自分は濡れたて?、笑かしよんのお・・・
アハハハハハ・・・

「笑い事ちゃうわい!・・・ホンマ・・・」
「ビショビショやし!」

「朝言つてた砂かけ婆と子泣き爺とでちょうどエエやんけ!・・・アハハ」(笑)・・・
「そうや!その爺さんも・・・アハハ」(笑)
妖怪ちゃうんか?」(笑)・・・」

■美山川・唐戸溪谷へのご案内

今ではこの工事現場も若生ロードパークとなり、眼下に唐戸溪谷を見下ろすドライブの憩いの場所となっている。

私も佐々里や若生に行く度に、必ずここに車を止めて、眼下に溪を見ながら深呼吸する場所でもある。(しかし、さすがに今は「砂かけ婆」は探さない)

ここから上流、出合橋までは荒々しく太い流れの険しい溪で、とても水面の小さな毛鉤に出る気がせず、もっぱらウェットになるが、どちらかと言えば余り好まない。

むしろ唐戸溪谷と言えばここから下流が気に入っている。最近は景色を楽しむだけで「無

沙汰しているが、今でも美山川の核心部はこの唐戸溪谷だと思っている。

最もお気に入りのはロードパークから少し下がった所にある古びた看板から入川道を降りてロードパークまでを釣りあがるコースで、入渓点は中州があつて皆が手前を釣り上げるのか、奥側が結構竿抜けになっていた。

この中州上手の「子泣き爺」のプールを越えて少し先にある瀬はいつもワクワクするところ・・・仕留めた「あま」も数え切れない。

他の河川ならロングリーダーで攻めるポイントだが、昔から通っているポイントでもあり、パターンが染み付いているのかドライブライアクションで長いスラックラインを出して釣るの

がお決まりの様になっている。

ここはどういう訳か虹鱒が良く釣れた。最近釣つたないので「釣れた」としておくが・・・

「このヤマメ、虹鱒みたいやなあ」・・・

と暫くの間、私の仲間内では全員がヤマメと信じて、

この溪に騙されていた。ある時・・・
「出たあ・・・かいぞあ・・・「あるやろあ」と思うや否や、その尺物は水面高々とジャンプした。

「・・・？・・・虹鱒？・・・エエ？」・・・ネットに収まったのは腹が黄色くなりかけてはいるものの、紛れもない虹鱒だった。この時、今までヤマメと信じていた魚は全て虹鱒だったことに初めて気付かされた。

(上流の須後辺りで放流されてるらしい・・・) その虹鱒は荒瀬や白泡の下をウェットで流すと結構向うあわせでヒットした。

ドライがサッパリの時でもこの方法で何とかなった。

しかし、やはり魚影は濃いとは言えない・・・新緑が青葉になり梅雨の音が聞こえ始めるとやはり雑魚天国の溪である。

長らく「無沙汰」なので、いっぺん久しぶりに行かんかね・・・

しかし、「砂かけ婆」は別として、「子泣き爺」だけは絶対に背負ってはならない。

何とか渡れたから良いものの、ズッコケでもしたら事故にもつながりかねない。

あれ以来、川原のキャンプに行っても、自分の子供でさえも背負って川は渡らないことになっている。

